



昨年11月の唐津市における設立総会

電源地域 振興トピックス

町の活性化と“再生”に向けた各地の取り組み

このコーナーでは電源地域各地の地域振興に向けた話題を取り上げています。今回は佐賀県唐津市・玄海町の日本版「コスメティックバレー」、福島県只見町の「ユネスコパーク」、同県檜葉町の仮設商店街、山梨県甲州市の「体験型ツーリズム」などの取り組みに関する話題をお届けします。



日本版「コスメティックバレー」を目指して

佐賀県唐津市・玄海町

フランス中部の都市シャルトルを中心とする半径150kmの地域は、「コスメティックバレー」と呼ばれ、世界最大の化粧品産業の集積地として知られる。ロレアルやシャネルなど約800の企業の工場や研究施設が集まり、製品出荷額は2兆3,400億円、7万人の雇用を創出

している。しかも、周辺農家が栽培する植物から化粧品原料を抽出し、製造・出荷まで一貫して行っており、化粧品企業はもろろん、地場産業の活性化につなげているエリアだ。

その「コスメティックバレー」の日本版を目指す6次産業化の事業が、佐賀県唐津市周辺で始まっている。昨年11月、「ジャパン・コスメティックセンター」が設立され、市内にある化粧品分析企業・OEM製造企業をはじめ、全国各地の企業が参加した。会員は現在87社で、その数は広がりつつある。支援会員として、佐賀県、唐津市、玄海町、経済産業



省九州経済産業局、九州大、佐賀大、唐津商工会議所など、産・学・官あがてのプロジェクトだ。契機となったのは仏・コスメティックバレー協会名誉会長のアルバン・ミュラー氏の唐津市訪問だった。成長著しいアジア市場に近い唐津の立地、玄海町にある「薬用植物栽培研究所」、天然由来の化粧品原料素材を育みうる豊かな自然環境、そして既に化粧品の製造・検査・物流関連会社が集まってミニクラスターを



ユネスコエコパークに登録決定！

福島県只見町

本年6月12日、只見町の全域および檜枝岐村の一部が、ユネスコが実施する「人と自然との共生を実現する人間と生物圏(MAB)計画」の中心事業である生物圏保存地域(ユネスコエコパーク)に、東北地方で初の登録地となることが決定した。ユネスコエコパークとは、地域の自然環境の保護・保全を図りつつ、自然環境や天然資源を、持続可能な形で活用すること、地域の社会的な発展を図ることを目的に設けられたものだ。現在、ユネスコ

形成していることが、ミュラー氏の目に止まった。現在の主な事業は、海外ビジネス交流事業や企業間のビジネスマッチングなどの事業化支援、公設試験場や大学等との連携による原料素材の調査など。また、情報発信にも力を入れている。今後は、「フランスのブランド力と日本の製造技術を融合しアジア市場開拓に取り組む」ことと、「地域の一次産業の活性化」を目標としている。

「残雪の田子倉湖」
只見町観光まちづくり協会提供





エコパークは、世界では119ヶ国631地域、日本国内では只見を含め7地域が登録されている。

只見町は過疎・高齢化が進む山間地域にありながら、地域資源を活用した地域振興に取り組んできた。平成18年に「雪と暮らすまち ブナと生きるまち」を理念に掲げ、豪雪地帯である只見町特有の自然環境、生活文化、産業を活かした町づくりを推進する地域振興計画を策定した。平

産 業遺産群を線でつなぎ「体験型ツーリズム」を展開

山梨県甲州市

全国各地には、我が国の産業近代化の過程を物語る数多くの建築物、機械、文書が今日まで継承されている。その代表的なものが本年度、世界遺産に認定された「富岡製糸工場の跡」。経済産業省では、地域活性化の有益な「種」として、地域の活性化に役立てるため、各地に残るこ

した文物を「近代化産業遺産」として認定している。山梨県甲州市(旧勝沼町)は、江戸時代からのブドウ栽培と、明治

成19年には只見町の豊かな自然環境を保護・保全し、次世代に引き継ぐ責務を「自然首都・只見」として宣言している。ユネスコエコパークの目的実現のため、「自然環境、生物多様性の保護・保全」、「地域の環境資源を活かした持続可能な社会経済的発展」、これらを実現するための「調査・研究および人材育成」に関する事業を推進し、町づくりの具体化へ戦略的に取り組むこととしている。

初期から続くワイン製造の町として発展してきた。市内には、近代化遺産とも



いえる施設が点在するが、それを整備・修復し、市内のワイナリーと結びつけた観光ルートを作り出した。平成11年度に立ち上げたこのプロジェクトでは、JR中央線の線路付け替えによって廃線となったトンネル2本の無償提供を受け、うち1本をワイン貯蔵庫(ワインカーブ)として再利用し、もう1本は遊歩道として整備。これらを市内に点在する

帰 還を目指して 仮設商店街がオープン

福島県楢葉町

ワイン製造の近代化遺産やワイナリー、史跡などをつなげてフットパス(遊歩道)とした。平成20年からは、地域内の住民組織、事業者により組織された実行委員会によるイベント「ワインツーリズム」を開催し、翌年、第4回まち交大賞「創意工夫賞」を受賞している。この取り組みの特徴は、近代化遺

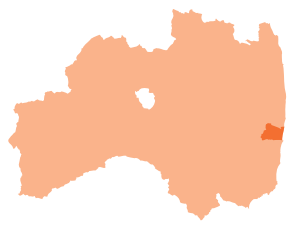
2015年春以降の住民帰還を目指す楢葉町で、今年7月31日に、仮設商業共同店舗「ここなら商店街」がオープンした。売り場面積計約375㎡のプレハブ平屋で、食堂2店、スーパー1店が入居している。商店街は、中小企業基盤整備機構が建物を整備し、店内の設備や備品は県および町の補助により整えた。県内の避難指示区域内で商店街が開業するのは初めて。

「ここなら商店街」というネーミングは「飲食も買い物もここならできる」、「ここは楢葉」を掛け合わせて付けられたもので、復興への強い思いがにじむ。入居した食堂は、そば・うどんの「おらほ亭」と、ラーメンや定食などを提供する「武ちゃん食堂役場前

産を線でつなぐことにより、地域資源の面的な広がりが可能になっていること。今では、甲州市から甲府市、笛吹市、山梨市と広がり、山梨県を代表する「体験型ツーリズム」となっている。

【お問合せ】
甲州市観光交流課
☎0553-32-2111(代)

店」。スーパーは町内にもとあった「ブイチエーン楢葉店」。開業以来、避難地域から、一時的に町を訪れる町民や復旧作業員らで、にぎわっている。



オープン当日の様相